

第1章 流域の自然条件

1-1 河川・流域の概要

鈴鹿川は、三重県の北部に位置し、その源を三重県亀山市と滋賀県甲賀市の県境に位置する高畑山（標高 773m）に発し、幾つもの溪流を合わせながら、山間部を東流し、加太川等の支川を合わせて伊勢平野に出て、東北に流下し、安楽川を合わせ河口より 5km 付近の地点で鈴鹿川派川を分派したのち、内部川を合わせ伊勢湾に注ぐ、幹川流路延長 38km、流域面積 323km² の一級河川である。

その流域は、三重県四日市市、鈴鹿市、亀山市の 3 市からなり、流域の土地利用は山地等が約 59%、水田や畑地等の農地が約 31%、宅地等の市街地が約 10% となっている。

流域には、JR 関西本線、紀勢本線、近鉄名古屋線及び東名阪自動車道、国道 1 号、国道 23 号、国道 25 号等があり、この地方の交通の要衝となっている。このように発達した交通網を背景に、四日市市の臨海部には石油コンビナート群をはじめとした産業が発達し、鈴鹿市、亀山市では自動車産業や電子部品等を中心とした工業が発達している。また、中流域の扇状の台地では緩やかな地形を利用したお茶の栽培が盛んで県内有数の産地となっている。

古来より鈴鹿川沿いは近江・大和方面への重要な交通路として利用されており、古代の三関のひとつである「鈴鹿の関」が置かれていた。また、鈴鹿川沿川には旧東海道が通り、宿場町が開け、今も関宿の街並みなどが当時の面影を残している。

このようなことから、鈴鹿川流域はこの地域における社会・経済・文化の基盤を成している。

さらに、源流部は鈴鹿国定公園に指定され、石水溪や小岐須溪谷等の自然豊かな景勝地が点在するなど、豊かな自然環境・河川景観にも恵まれていることから、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。



図 1 - 1 鈴鹿川流域図

表 1 - 1 鈴鹿川流域の各種緒元表

項目	緒元	備考
幹川流路延長	38km	全国 101 位 / 109 水系
流域面積	323km ²	全国 102 位 / 109 水系
流域内市町村	3 市	四日市市、鈴鹿市、亀山市
流域内人口	約 11 万人	
支川数	45 支川	

1 - 2 地形

流域の地形は、上流部は北西境界線を尾根とする 800～1,000m 程度の鎌ヶ岳、^{かまがたけ}仙ヶ岳、^{せんがたけ}高畑山などからなる鈴鹿山脈によって概ね占められており、山脈裾部の丘陵地では急峻な地形を有し、山間をぬって渓谷が形成されている。中流部は、急傾斜河川よりもたらされた扇状の台地、流域東部の沖積低地からなり、亀山市街地周辺からは、段丘上に平地が広がっている。中流部から下流部にかけては、北側は鈴鹿山麓から発する支川御弊川、内部川にはさまれた標高 60～180m の広い扇状の台地が波状に重なり、南側は河口まで沖積平野が形成され肥沃な耕地となって、伊勢湾に連なっている。

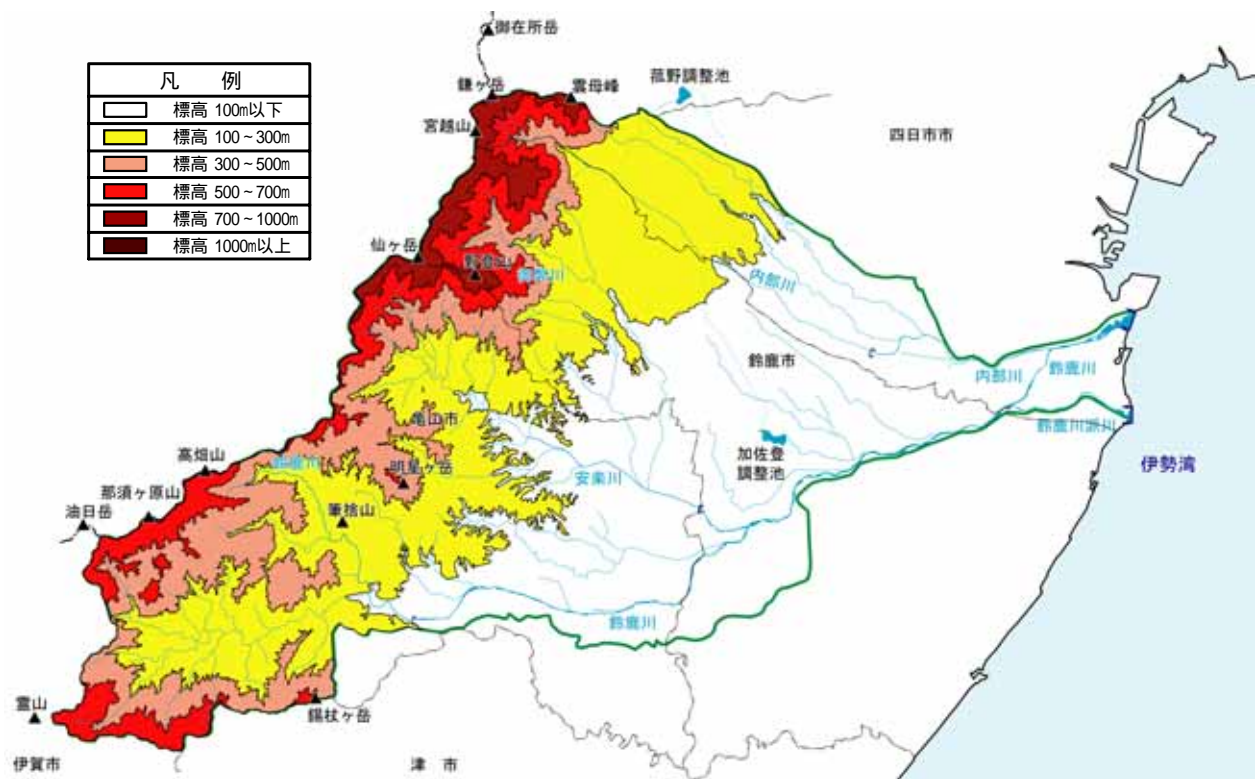


図 1 - 2 鈴鹿川流域地形図

【出典：「1/50,000 地形図(国土地理院)」より作成】

1 - 3 地質

流域の地質は、山岳部は主に花崗岩類(黒雲母又は両雲母花崗岩)・花崗閃緑岩(黒雲母角閃石花崗閃緑岩)よりなり、一部、加太川上流に中新世鈴鹿層群加太累層(礫岩、砂岩、シルト岩及び凝灰岩)、御幣川上流に古生代秩父層群(砂岩、頁岩、輝緑岩および輝緑凝灰岩)、三波川変成岩類(石灰岩)がある。

本川中流部および安楽川、御幣川にはさまれた地帯は、鮮新世奄芸層群(砂岩、泥岩、礫岩、凝灰岩、亜炭)、御幣川、内部川にはさまれた地帯は沖積層(砂礫および粘土)で形成されている。

水源地一帯の砂岩、花崗岩類は風化が著しく、山崩れの素因を持っており、古くは江戸時代より砂防工事が実施されている。

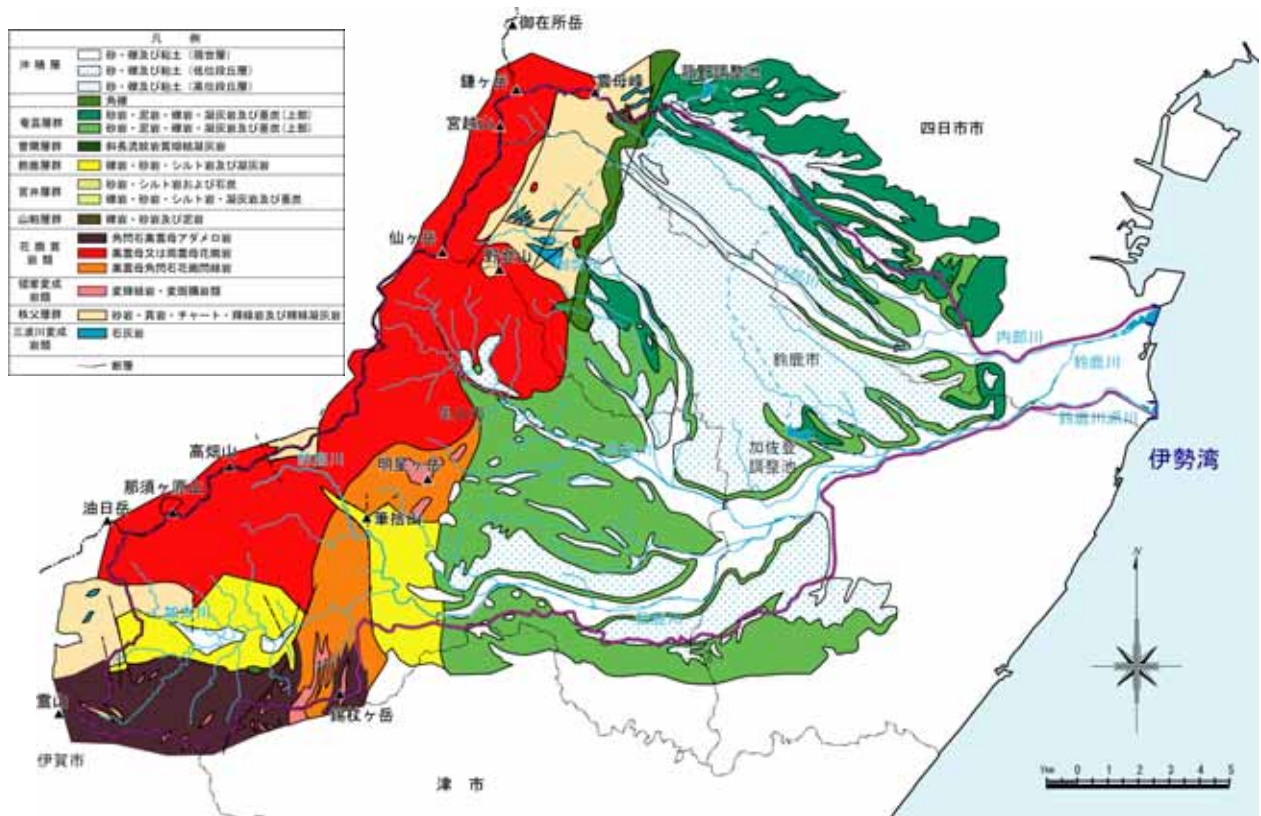


図 1 - 3 鈴鹿川流域地質図

【出典：「三重県地質図(三重県鉱業会；昭和55年)」より作成】

1 - 4 気候・気象

流域の気候は、年平均気温は15程度で、全体的に温暖な気候を示している。流域内の平均年間降水量（昭和61年～平成17年）は、山間部で2,200mmを超え、平野部で約1,800～2,000mmである。

また、鈴鹿山脈が西側に位置していることから、“鈴鹿おろし”と呼ばれる冬の季節風が強いことが知られている。



図1 - 4 年平均降水分布図（昭和61年～平成17年平均）

【出典：「雨量年表（国土交通省）」、気象庁データ】

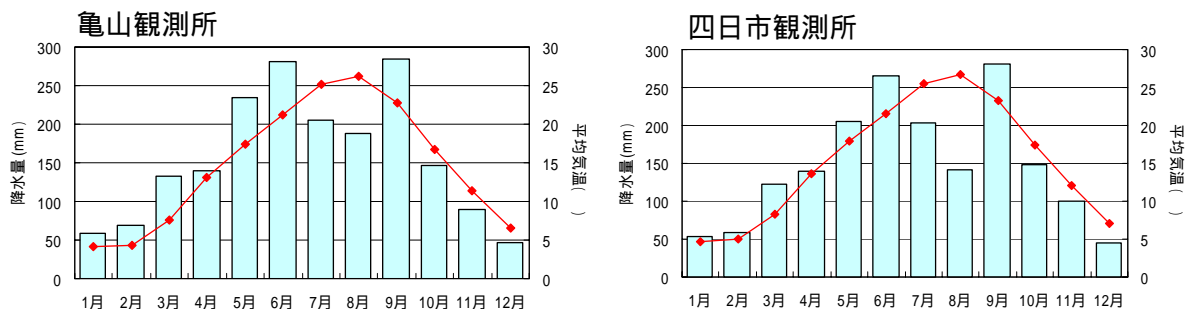


図1 - 5 月別平均気温・降水量変化図（昭和61年～平成17年平均）

【出典：気象庁データ】